

## 若き友へ

2011年11月12日  
経済学部教授 高島 均

### 所感 11-2 グアテマラ通信その2ーキャピトルにてー

グアテマラの首都シウダード・デ・グアテマラのことを、人々は、キャピトルとかグアテ(あるいはグアテマラ)とかシウダードとか呼びます。そのシウダードへ出かけると、よく荷台に牛を乗せたトラックに出会います。牛たちはその運命を知っているかのように、不安そうに移り行く景色を眺め、互いに身体を寄せ合っています。そんな風景を目にして心を痛めていると、やがて、その同じトラックが荷台を空にして戻ってくるのに出会います。もう、今頃は、屠殺場で殺されて吊るされているでしょう。何日もしないうちに、頭といくつかの肉の塊に分けられて、どこかの街のメルカドの肉屋さんに吊るされているでしょう。妻が、こうしたトラックを見るたびに、心が痛むと言います。そして、和尚さんが、「牛さん有難う。命をくれて有難う。牛さんがくれた命を大事にします。」と言って念仏を唱えて感謝しながら肉を食べなさい、と常々言っていたことを思い出すとと言います。それを聞いて、私は、子供の頃のことを思い出しました。私が小さな子供だった時分、そう言えば、牛や豚を乗せたトラックが屠殺場に向かうのを目にしたことがありました。でも、終戦直後のまだ貧しい頃とはいえ、日本では、大人の背ほどもある大きな肉の塊が、肉屋の店先に吊り下げられていることはありませんでした。勿論、お客に見えない後ろの冷蔵庫(室)には、吊るされていたのですが。従って、肉屋さんに買い物に行っても、私たちが、日々、他の動物を殺して食べているということを意識することはありませんでしたし、いつしか、屠殺場へ向かって目の前を通り過ぎて行った牛や豚を乗せたトラックのことは忘れてしまいました。妻の言葉を聞いて初めて、そういえば、子供の頃、同じような風景を見たな〜と、忘れていた記憶が思い出されました。

ここグアテマラでは、メルカドに行けば、目の前に大きな肉の塊が吊るされており、お客の注文を聞いて、肉屋さんがその塊に包丁を入れて肉を捌いて売ります。吊るされているその大きな塊を見ると、毎日のように美味しく食べている肉が(実は、私はさほど裕福ではないので日本で牛肉を買うのは年1回ほどです)、実は殺した動物の肉の一部なのだという事実打ちのめされ、なんて人間は罪深いのだろう、という気持ちが沸いてきます。況や、殺されるためにトラックに載せられて運ばれている牛が身体を寄せ合い不安そうに辺りを見回している姿を見、空になって帰ってくるトラックの物淋しい音を折に触れを聞いているわけですから。

日本のように、自分たちが普段何気なく食べている肉が、実は自分たちが殺した動物の肉なのだという、

あまり考えたくも無い事実が思い出されることも無いように、肉が小さく切り分けられて、パックに入れられてスーパーで売られている国に育つと、命の大切さを思い知ることができなくなってしまうように思います。と同時に、命(大切なもの)を自分のために捧げてくれたものに対する感謝の念も忘れてしまうようです。見たくも無い現実、見たくも無い事実であるからこそ、嫌でも見ざるを得ないようになっていなければならないのではないかと、ここグアテマラで生活していると思います。